



図3 本丸全体図 (金澤 2009)

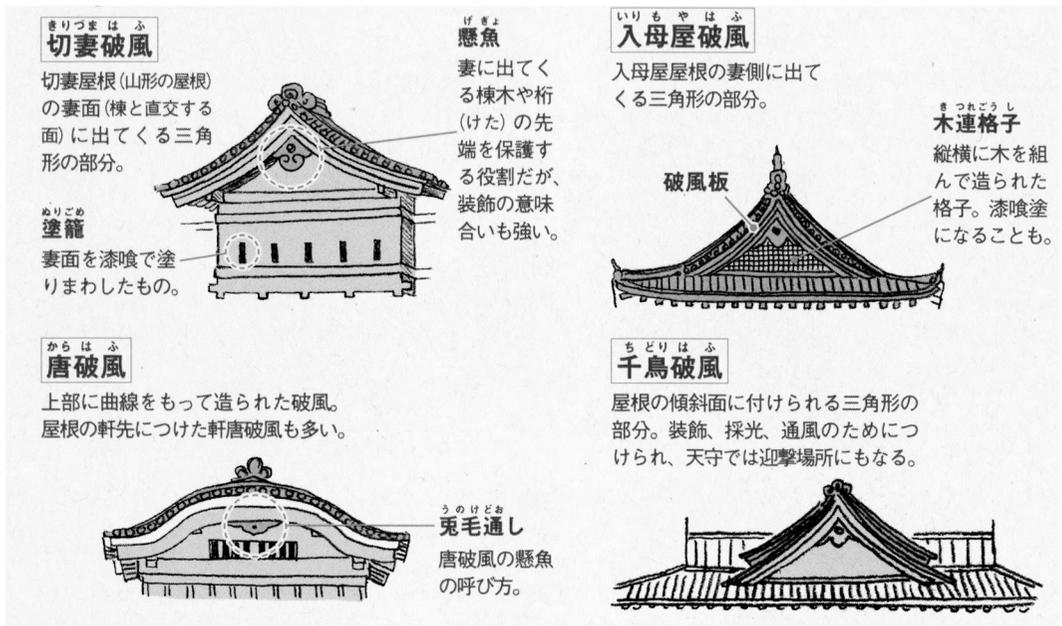


図4 破風の種類 (米澤 2015)

●石垣

石垣は、積み石となる石材を主材に、背後の裏込め石と一体的に構築され、地形条件などによっては盛土も併用した構造の遮蔽・防御施設のことを指します。中世にも石垣状の石積みや石塁は散見されますが、石垣は定義上、裏込めに栗石をもつ構造のものを指します。

岡山城は、“石垣の博物館”と呼ばれるほど多種多様な石垣をもち、全国的にも珍しい城です。この“石垣の博物館”と呼ばれる要因として、宇喜多秀家が慶長2年(1597)に一定程度完成した後も曲輪の改造が幾度も繰り返されたことが挙げられます。今回は、石垣の構造・種類、岡山城の石垣、未来へと繋いでいく石垣の修復について記します。

<石垣の構造・種類>

○構造

石垣は、表面にあらわれる石積みのみではなく、その内側の施工も趣深く、外面内面問わず、石垣に部分名称があります(図5)。これら各部位は、石垣を構築するにあたって重要な役割を果たします。

- ・根石 — 石垣のうち、最下段にあたる石。地中深くに埋まり、基礎的役割をもつ。
- ・栗石 — 裏込めに用いる礫。控え以上の奥行で充填する。排水等の役割をもつ。
- ・桐木 — 水堀や低湿地に石垣を築く際に用いる。地盤沈下防止の役割をもつ。

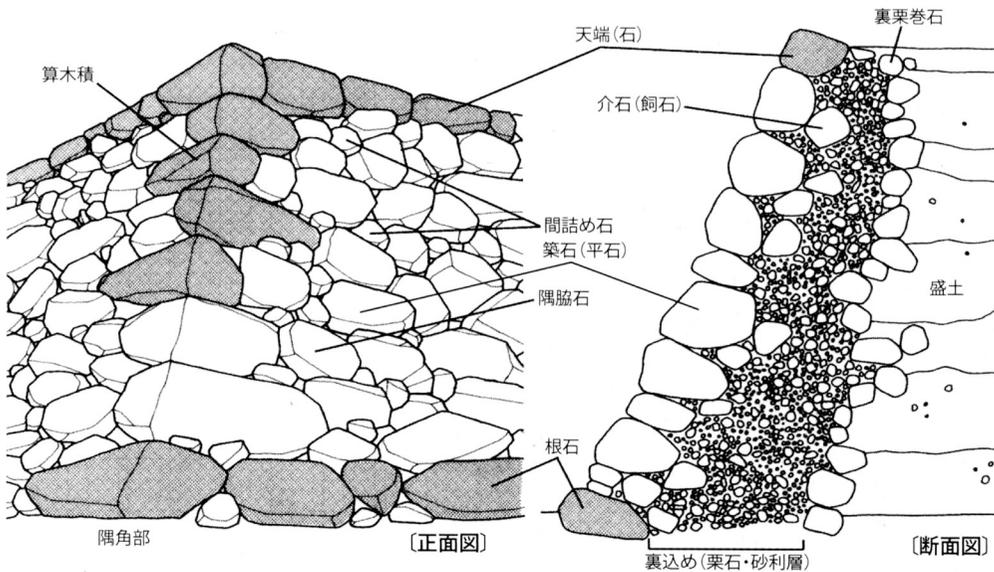


図5 石垣の構造と部分名称 (文化庁 2015)

○種類

石垣は、その外見に該当する積石の加工度によって分類されます。3種類に大別され、積み方によってそれぞれ2分されることから6種類に分類されます。分類基準は下記のチャートの通りです。

※18世紀以降にみられる谷積み、亀甲積み、玉石積み、牛蒡積みの説明は省略。

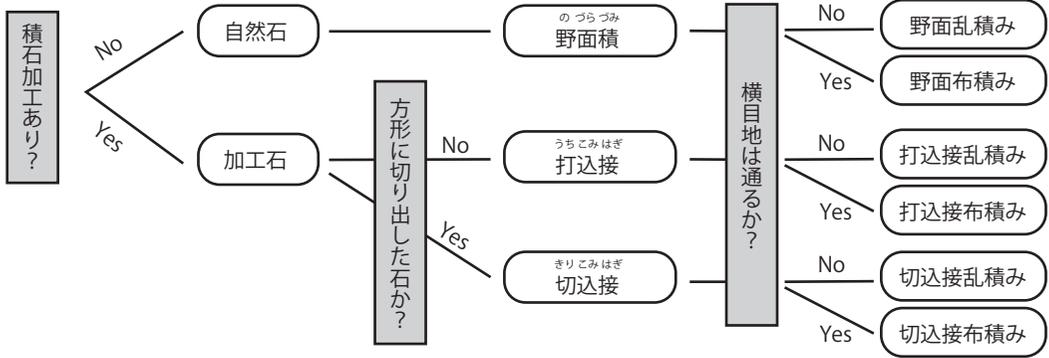


図6 石垣の分類

<岡山城の石垣>

○野面積み

自然石が主体の野面積みの様相を呈します。主に本丸編年2～4期に野面積みが採用され、城主が変わっても積み方に変わりがなかったようです。とはいえ、時期差や城主によって同じ野面積みでも特徴があらわれる点が趣深く感じられます。目地は、数石にわたって横目地を通す部分がありますが、断続的で布積みとまではいえません。

下の写真は、岡山城の野面積みの中でも、城主による違いが最も観察しやすい石垣です。本段東側の石垣で、木々が多く、なかなか人目につかない場所となっています。写真左手側の宇喜多期の石垣は、四角めな石を丁寧に組み上げる一方で、右手側の小早川期の石垣は丸めかつ小ぶりの石を粗く積んでいる状況が窺えます。

(写真上:大納戸櫓跡の石垣)

(写真下:本段東側の石垣)



○打込接(写真:月見櫓石垣)

石材が矢穴を伴う割石が主体の石垣です。石材の特徴は、場所によって様々なものが見受けられ、石材を半分に割っただけの石や全面を割り、ノミキリの加工痕が明瞭なものがあります。この特徴の差異は、年代によるものというのではなく、ほぼ同時期のものと考えられます。石垣の一部には、刻印がはっきりと観察できます。

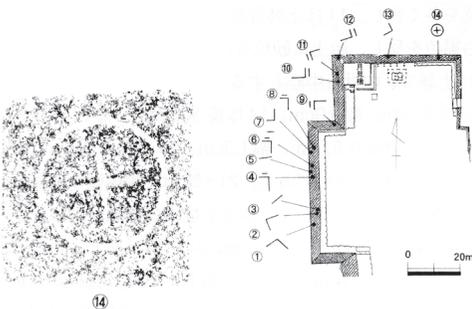
刻印は、14例ほど確認されているようで、「ㄱ」が13例で、「⊕」が1例です。このうち、前者の刻印「ㄱ」は、類例を探すと、池田忠雄あるいは当時の池田家との結びつきが強いようで、徳川期大阪城で忠雄の普請担当部(村川1970)や江戸城に関わる伊豆の石切り場で忠雄を示す「松平宮内」の刻印と合わせて刻まれていることが判っています(野中2007)。現時点で見ついている刻印に加えて石垣の高位部で、さらに新しい刻印が見つかる可能性があります。月見櫓周辺の現役高石垣に多く見られるもので、月見櫓周辺の石垣は、すでに発見されている刻印や未だ見つからない刻印探しのよいポイントです。矢穴については、多くの築石で確認でき、矢穴の平面形状は、細長いものから徐々に幅広いものへと変化します。その背景には、石材の種類や採石地、使用道具の差異があります。



月見櫓の石垣(打込接)



矢穴が明瞭に残る石材



刻印が観察できる石垣(左:乗岡1997)